

平成22年度第2回北海道地方独立行政法人評価委員会  
試験研究部会 議事録要旨

- 
- 開催日 平成22年8月12日(木) 15:30 ~ 17:30  
○場所 北海道庁別館 地下1階共用会議室  
○出席者 (委員) 石橋部会長、安達委員、北野委員、旗本委員、細川委員  
(事務局) 総合政策部科学IT振興局総合研究機構運営支援室 渡辺参事、阿部主幹、成田主幹
- 議 事 (1) 地方独立行政法人北海道立総合研究機構年度評価実施要領について  
(2) その他
- 資 料 資料1 地方独立行政法人北海道立総合研究機構年度評価実施要領について  
資料2 年度評価実施要領比較表  
資料3 地方独立行政法人北海道立総合研究機構年度評価実施要領(素案)  
資料4 地方独立行政法人北海道立総合研究機構の平成22年度項目別評価の視点(イメージ)  
資料5 平成〇〇年度 業務実績報告書について  
資料6 平成〇〇年度 業務実績に関する評価結果について
- 

(事務局)

- 開会挨拶  
渡辺参事

(部会長)

- 本日はお忙しいところご出席いただき感謝する。丹保理事長のもと職員が一丸となって、道民生活の向上と道内産業の振興に寄与する機関として、未来に向けて夢のある北海道づくりに取り組んでいると伺っている。本日は、来年度から実施する北海道立総合研究機構の年度評価について、その実施要領の審議を行うこととなっており、より良い評価基準を策定するため、委員の皆さんのご協力をお願いしたい。
- 議事 「(1)地方独立行政法人北海道立総合研究機構年度評価実施要領について」説明要請。

(事務局)

- 資料1～資料6に基づき説明。

(部会長)

- 自己点検の評価基準は、他県の状況を参考にしたということだが、試験研究と大学の両方の地方独立行政法人のある県では、どちらも9割以上や9割未満など同じような表記となっているのか。

(事務局)

- 参考資料4、5にあるとおり、同じ評価基準で試験研究と大学を評価している県や、試験研究と大学で異なる基準を設けている県など、様々である。他県の状況を踏まえつつ、札幌医大との整合性も図っている。

(委員)

- この基準は、現場で了解しているのか。

(事務局)

- 法人本部とは、意見交換している。

(部会長)

- 研究本部長は知っているか。

(事務局)

- 法人本部から研究本部長へ意見を聞くまではいっていないと思う。

(事務局)

- 札幌医大の評価基準は国立大学法人の評価基準に基本的に準拠している。9割が高いか低いかということもあるが、税金を使う以上、道の試験研究機関も9割を前提にがんばっていただく、という考え。法人本部では、基本的にS、A、B、Cの考え方は了解いただいていると思う。

(委員)

- 医大の評価の分布状況はどのようになっているか。

(事務局)

- 平成20年度の実績については、自己評価がS～9、A～447、B～2、C～0であり、評価委員会の評価では、S～1、A～414、B～41、C～2となっている。

(委員)

- Aにこれだけ集まるのは評価しづらい状況なのか。

(事務局)

- Aは9割以上ということなので、ほとんどのものが年度計画に近い実施状況になっていると判断されたと考えている。

(部会長)

- 数値目標がある場合は簡単だが、文章で記述となると難しい。

(事務局)

- 医大の場合も、初年度の評価は、SとAの判断基準が議論になったと聞いている。また、評価項目によっては、様々な性格のものがあて一律の基準も難しいため、個々に評価することになったと聞いている。

(委員)

- 医大と比べて、数値目標の比率はどのくらいか。

(事務局)

- 項目数自体は、医大の方が多。ただ、全体の項目数が300弱あるため、数値目標の比率でいえば医大とそれほど変わらないと思う。

(部会長)

- 医大の評価項目数はどのくらいか。

(事務局)

- 20年度は458項目、21年度は300弱。19年度は488項目であったが、評価委員会で再掲項目も多いので整理するよう意見があり、年々減少している。

(委員)

- 数値目標の件数などをカウントするプロセスについては、全面的に信用して評価する立場でよいか。

(事務局)

- 根拠となる数値の確認は、現地確認することまでは考えていないが、道総研に資料提供してもらうことは可能。

(委員)

- 今、国立大学では、評価疲れで仕事をしているのか評価をしているのかわからないといった状況。委員会は、項目にないものは評価しない、議論しないといった状況。評価項目を決めると、それ以外のことをしなくなる可能性がある。数値目標は怖いところがあり、どこかでカウント方法が適切かどうかのチェックは必要な気がする。

(部会長)

- 法人が行う自己点検は、法人内部だけではなく外部も入るのか。

(事務局)

- 内部のみである。

(委員)

- 医大の評価では、9割以上9割未満や、S A B Cの区分についての検討などはあったのか。

(事務局)

- あったと聞いている。何を持って9割とするのか、数値ではなく文章で「検討する」「取り組む」などと記載されている場合、検討さえすればAになるのかといった内容と聞いている。そういったものについては、検討をすればよいということではなく、内容を聞いて確認した上で、それがAなり、当初の予定を上回っていると認められればSにしようという議論になったと聞いている。

(部会長)

- 検討して、どの程度明らかになったのかというところで判断することになると思う。

(事務局)

- 医大の過去の議論では、事務局内部での検討ではなく、例えば、庁外の人を含めた検討組織を設けて検討した上で結論を出した、ということであれば検討したことに当たるのではという議論もあったと聞いている。

(委員)

- 私も研究機関として自己点検し外部から評価されている立場。数値目標は比較的设置しやすいが、2つの問題がある。例えば論文数でいうと、委員会は数値目標を上げる傾向にあって、どんどん右肩上がりになって、そのことだけが目的になっていくということ。もう一つは、そういったことを反省して、質的な評価をしようとする、委員から様々な意見は出るが、全分野に詳しい委員はいないので、かなり無理な要求も出てくる。それはどうなのかと思う。

私どもが一番苦しんだのは外部資金の導入。数値目標を上げると、外部資金を確保するために、手段を選ばなくなってくる。何億確保したらインセンティブを与えるという内部制度を設けたが、機関全体としての資金の運用で考えると、交付金を充てるので、必ずしも正しい方法ではない。

数値目標はかなり気をつけなければならない。

それぞれの評価項目をきちんと見なくてはいけないと思う。今年だけの話だけではなく、次第に改善されていくと思うので、初年度から100%を狙うと相当無理が起きるのではないか。

S A B Cについては、国の独法はほぼ同じ評価方法で、内部評価はA-やA+などもっと細かく設定している。目標を達した場合は、基本はBとしている。90%以上ということではなくて、目標を達していれば、という考え方。

この委員会が論文数にカウントする論文の定義について、議論するような方向に行かないか心配。ある程度の自主・自立を認めることも大事では。評価プロセスが向上しない。

(部会長)

- 評価委員会としては、法人が行った自己点検について判断していく。数値目標でSなりAなりの根拠を、ヒアリングなどで聞くことが出来るのか。

(事務局)

- 大体7月頃、評価の前に直接ヒアリングしていただくことを考えている。

(委員)

- 評価の時に、例えば、プロジェクトチームを立ち上げて検討すると記載されていた場合、どういったチームなのかなど資料を確認することは出来るのか。

(事務局)

- 基本的には、評価調書の中に概要がわかるよう記載されるものと考えている。ヒアリングなり委員会で資料提供の要望があれば、対応は可能である。例えば医大の場合は、医大に出向いてヒアリングを行っている。これからの話にはなるが、道総研に行ってヒアリングすることも考えられるが、全道に22機関あるため、その場で確認できない資料もあるかと思う。

(委員)

- 委員によって知識の差など様々であり、チェックリストやマニュアルのようなものがあれば良い。

(事務局)

- 一度試行的にやってみて、例えば項目別評価の視点など多々修正が出てくると思うので、4月にご説明させていただきたい。

(部会長)

- それでは、ご意見・ご質問も出尽くしたようですので、地方独立行政法人北海道立総合研究機構年度評価実施要領を成案にしたいと思いますが、よろしいか。

(委員同意)

(部会長)

- それでは、当部会として、「地方独立行政法人北海道立総合研究機構年度評価実施要領」を決定し、8月30日開催の地方独立行政法人評価委員会に報告する。  
議事 「(2)その他」について、「① 地方独立行政法人北海道立総合研究戦略課題の決定及び平成22年度職員研究奨励事業について」を説明要請

(事務局)

- 地方独立行政法人北海道立総合研究戦略研究課題及び平成22年度職員研究奨励事業の概要について報告。

(部会長)

- 戦略研究の年間の予算は決まっているのか。

(事務局)

- 年間1課題あたり2,000万円で、3課題あるので6,000万円である。

(部会長)

- 最後に、議事「②試験研究部会の視察について」を説明要請。

(事務局)

- 試験研究部会の視察について、今年度の視察先や日程等の確認。

(部会長)

- 最後に、ご意見、ご質問はないか。

(委員)

- 自己評価は案のようなものを既に作成しはじめているのか。

(事務局)

- まだである。年度内には試行的に実施してみる。

(部会長)

- これで、試験研究部会を終了する。